

いつか羽ばたくための
モノローグ

2

鈴野しずね

「ギミー・ヘブン」

共感覚という言葉を知って以来、私は自分自身がなんだか得体の知れないイキモノのように感じてしまうようになった。

私はいったいどんな人間なのか？私が持っている共感覚とはどんなものなのか？それをちゃんと知りたくて、共感覚に関する本やいろいろな文章を読んだ。

そしてある映画を知った。

「ギミー・ヘブン」 (2006年1月公開)

共感覚をモチーフにしたサスペンス

キャスト：江口洋介 安藤政信 宮崎あおい 他

監督：松浦徹

エンディング曲「ガーベラ」竹仲絵里

灰茶色

サンドペーパー

ざらざらは、サンドペーパーの色、質感

やがて小さなガラス瓶の透明な青

--この記事の色彩--

エンディングで流れた「ガーベラ」に、ずっと心が掴まっていた。

映画の最後のほうで登場する二人の言葉は美しく、惹かれていくのを止められなかった。

美しい詩のような言葉が、二人の間でゆっくりと交わされていく。

それは共感覚を持った二人が、お互いの感性が同じであることを確認し合うシーン。

“石油ストーブの匂いは？”-----

----- “ざらざらしてる”

とは、私は思わない。

でもそう感じる心の道すじがわかるような気がした。

(“ ”内はこの映画に出てくるセリフの一部)

エンディング曲「gerbera」 竹仲絵里

1番の歌詞に、声を殺して号泣してしまった。

そこには、他人に理解され難い共感覚を持っているが故の、深い孤独が描かれていた。

私は自分が今まで何をやってきたのか、この曲を透して初めて知ったような気がした。

ほんの軽い気持ちで始めたブログ。

ブログっていったいなんだろう？という好奇心だけで、書くつもりも無いのに登録した。

無料だし、いやだったらすぐに削除すればいいや、そう思った。

手順どおりに設定するだけ、そんなの簡単にできると思ったのに、何度やってもエラーになってなかなか先へ進めない。

やっとOKになっても、その次の段階でまたエラー。

そんなことを繰り返しているうちに、だんだん腹が立ってきた。

ぜったい最後までやってやる、とムキになって設定作業を続けた。

やがてきれいな背景の枠組みが完成した。

ちょっと感動した。

そこに本文を入れさえすれば、いっちょまえのブログになるのだ。

なんか書いてみたくなった。

やばかったらすぐに削除しちゃえばいいや、そう思って記事を書いた。

そして初めて自分の文章がネットに出た時、とても感動したのだった。

ガラス瓶に宛先の無い手紙を入れて、大海原に投げ込んだような感覚だった。

きっと誰も気がつかないだろう。

でもそれでよかった。

まるで自分自身が、陽光降り注ぐ南の海のと真ん中で、のんびりプカプカ浮いているような気がした。

日光浴をしているようでもあり、とても気持ちがよかった。

たまに頭上を海鳥が飛んでいくかもしれない。

大型船が遙か遠くを通過していくのが見えるかもしれない。

気が向いたら、綺麗な砂浜のある無人島に打ち上げられたらいいな、なんて映像がいくつも浮かんで来て、とても気持ちがよかった。

そして私はガラス瓶を、次々に大海原に放り込むようになった。

「gerbera」は、そんな私の中の孤独を、表に引っ張り出してしまった。

大海原に投げ込んだガラス瓶、私はきっと誰かに見つけてほしかったのだ。

誰か私に気がついて

透明人間のままでいたくない

そんな自分の気持ちに気がつかないまま、私はガラス瓶を投げ込み続けていたのだった。

人間なんだから、言葉を持つ人間なら、他人に理解してもらいたいと考えるのは当然だ。

でも、説明すればするほどわかってはもらえなかった。

わかってもらえない原因の全ては、自分の話し方の下手さにあるのだと思ってきた。

だからそれは、いろいろに頑張れば解決できるのだと信じていた。

子供のころからずっとそう思ってきた。

でもそうじゃなかった。

わかるわけない理解できるわけないのだ、共感覚なんて。

ならば、私の今までしてきたことは全て無意味だったのだろうか？

もしそうなら、こんなにも長い間私はいったい何をしてきたのか？

虚しい、、、

でも、終わってしまった時間は、もう取り戻せない。

そして、わかってもらえないと気がついて、受け入れてほしいと願う気持ちは消せない。

だが、自分の中から共感覚を消すこともできない。

私はこれからいったいどうすればいいのか？何をしたらいいのか？

堂々巡りとわかっていても断ち切れないループ

断ち切りたい孤独

砂時計の砂は落ち続ける

断ち切れないループは

「ハムスター」

回し車のハムスター

円周率を唱えてる

数字の中を回ってる

どんなに走っても どこにも行けない

無意味で無限な螺旋の中に 自分を埋めてく

全部を使い果たす前に 円周率をぶった切って脱獄

隠れている出口を捕まえろ

いのちの発火点を探ろう

私をいざなうもの

そこに見える風景は --

- イメージは ---

そうこうしているうちに、予約してあった新譜が届いてしまった。

このアルバムは、ずいぶん前に予約していたのですっかり忘れていた。

さすがに聴く気にはなれず、しばらく放置してしまった。

でも気になっていた。

やがてアルバムジャケットの不思議な雰囲気を引きずられるようにして、封を切った。

アルバムは聴かずに、付いていた日本語の解説だけ読もうと思った。

読み始めて気がついた。

それはライブのネタバレと同じだった。

まだ聴いてもいないのに、アルバムの内容を知っても意味がない。

読むのをやめて、仕方なくCDをトレイに載せた。

静かに始まったその音は、まるで何かのプロローグのようでもあり、私を何処かへいざなっているかのようでもあった。

自分が惹き込まれていくのを感じた。

どんなに抵抗しても、心の奥のスクリーンに気持ちが向いてしまうのを止められなかった。

2曲目

ほらこの感じ、キライじゃないんだろ？

本当は好きなんだろ？

何かにそう言われているような気がした。

そうだよ、好きだよっ

嫌いなわけじゃないじゃん！

私の胸の奥で、我慢できなくなった誰かが勝手に叫んでいた ----

パルス --

-- pulse ---->

新譜を聴いた次の日、ようやく手が伸びた2曲入りのシングルCD。

それまでは、「gerbera」くらいしか聴いていなかった。

それ以外の音楽は、自分の中に映像イメージが浮かんでしまうことが怖くて聴けなくなっていたのだ。

「gerbera」は映画のエンディング曲だから、映画の具体的な映像に、自分の感覚を封じ込めることができるような気がした。

そんなんだったら、音楽なんて聴かなきゃいいのに

なのに、何故？

だって、戻りたかったから

何に？ 何処に？

だって、

なんで？ どうして？ 何処に？

ずっと自問自答の繰り返し。

そしてシングルを聴いた。

初めて聴いたわけではないのに、曲の内容とは全く関係なく、言葉の一つ一つがランダムに、自分の心境おかまいなしに心に入ってきた。

その一言一言に、胸が熱くなり泣いてしまった。

これ、ドラマのエンディング曲だったのに。

明るくて楽しいドラマのイメージで作られたんだろうに。

でもそんなことは、私の中では全然関係ないみたいだった。

きっと自分用に、心の中で勝手にカスタマイズしてしまうのかも知れない。

2曲目も同じだった。

胸が熱くなって泣き続けた。

2曲とも、私の中で優しくきらめいていた。

このシングルを、しばらく放心状態で聴き続けていた。

やがて、TVドラマでよく見かける、病室の心電図モニターが頭に浮かんだ。

まっすぐになってしまったラインが、音楽のビートに合わせて、再び波打ち始めるイメージになっていった。

そして少しずつその波形が大きくなっていき、いつか規則正しいリズムを刻み始めることができるような気がしてきた。

音楽のBeatは、Heartの鼓動と同じなのかもしれない、ふとそう思った。

私にとって音楽は、やっぱりなくてはならないもの、そして大切な宝物らしかった。

いつか羽ばたくためのモノログ 2

<http://p.booklog.jp/book/20775>

著者：鈴野しずね

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/shizushizu/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/20775>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/20775>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.